

(文章の論旨)

現代の日本の街づくり・社会に欠けているのは、地域コミュニティの存在である。その地域コミュニティを、バランスよく支えるために、日本の街の中にも、ブラジルやイタリアのバール、香港の飲茶楼のような、地域の様々な年齢の人々が集まるオープンな場所を作る必要がある。

(本文)

現在の日本の町づくりにおいて、今一番注目すべきことは、地域コミュニティの重要性ではないだろうか。

たとえば、ネット上で、mixi などの SNS が、大きく注目されるのも、日本の現代社会の中で、人が交流できるコミュニティが不足していることが、その原因であるように思う。皆、他の誰かと交流したい、他人と触れ合いたい、と考えているから、ネット上のコミュニティの人気が出たのではないだろうか？。しかし、ネット上のコミュニティでは、本当の意味で孤独を癒すことは難しい。今現在、日本の社会に、本当に必要とされているのは、現実の社会におけるコミュニティだ。

現在の日本の社会には、会社や学校、といった所属団体・公的なコミュニティは存在している。しかし、戦後の社会・地域構造の変化の中で、地域コミュニティが衰退したことは、現在の日本社会における、大きな問題である。

たとえば、学校に通っている人や、会社に通っている人は、学校や会社という共同体(コミュニティ)には属しているが、地域のコミュニティとの繋がりは、薄い。在住コミュニティの外で働くお父さんは、積極的に地域の人と交流を持っていなければ、住んでいる地域との繋がりが薄くなる。お父さんが、子供会の活動に参加していたり、帰り道の行きつけの飲み屋や、近所の友達、などを持っていれば良いが、もしそういう繋がりがなければ、例えば会社で働く父親は、同じ家庭内の母親と比べて、地域コミュニティとの関わりは、薄いだろう。

また、子供のいない人や、会社勤めしていない人、学校に行っていない人は、地域コミュニティとのつながりを持ちにくい傾向にある。つまり、何かの団体に一つも属していない人間は、現代の社会では、希薄な人間関係になってしまうのだ。昔だったら、そういった団体に所属していなくとも、地域コミュニティに属することで、人間関係を保つことが可能だった。

日本の地域コミュニティにおける、住民の交流機関としては、公民館が、各地域における、一番一般的な、地域コミュニティの公的機関だ。しかし、一般に、小学生までの子供のいる家庭や、老人会に入っている人以外(独身者、子供のいない家庭、中学生～大学生の学生、社会人、子供が成人した後の家庭など)は、公民館と関わりが薄い。そのことは、大きな問題である。

また、小さな子供のいる家庭は、子供会や近所の同年代の子供とのつながりで、地域コミュニティと関わっているが(または、老人会に入っている人なども同様だが)、同じ地域コミュニティ内での、異なる世代間の交流が、昔と比べて弱くなっている。また、現在では、以前に比べて、地域における人間的交流が薄く、地域における人間的繋がりが、家庭内のみで完結する傾向が強くなっている。例えば、昔は、子供を家族以外の、近所の人や、あいさつをしたり、間違っただけをしたら、叱ったりと、目を配る習慣があった。現在は、そういう社会的な力や人間的つながりが、大変弱くなっている。

昔なら、もし、問題を持った家庭があり、その家庭の子供が、恵まれていない状態にあっても、普段から近隣の人々があいさつしたり、心配してあげたり、そういった恵まれない子供を、精神的に支える面を地域コミュニティが持っていた。しかし、現在、家庭内暴力や、幼児虐待などが、増加しているのも、家庭内の問題だけではなく、地域コミュニティの力の低下も、大きく関わっているだろう。問題のある家庭というのは、昔も存在していたのだ。もし問題のある家庭が存在しても、その地域コミュニティが健全にそれを監視できれば、その問題を、多少ではあっても軽減できるだろう。地域コミュニティの衰退、家族外の人間関係の希薄化は、現代社会の人間関係における大きな問題である。つまり、日本の現代社会の大きな問題である。

海外の地域コミュニティは、どういう状態かというのは、参考になる。海外へ行くと、街の中に、公的空間以外に、地域のご近所さん達が集う場所が存在するのに、気づく。

香港ならば、朝食や休日に、ご近所さんが集まってくる飲茶楼や中華レストラン、朝、会社に行く前に新聞を読みながら、朝食をとれる、大衆的喫茶店兼食堂の茶餐店。ブラジルなら、Bar(日本でいうバーではなく、イタリア風揚げ春巻きのパステルやコロッケ等のちょっとした食べ物や、コーヒーやビール等を販売していて、店内でも飲食できる場所。)。イタリアも Bar が街角のあちこちにある。一日の始まりや、午後のティータイムに Bar は欠かせない。ご近所さんの井戸端会議のできる場所で、日常の中で大変大事な場所だ。

インドネシアなら、ワルンが街角にあって、男性中心だが、時間のあるときに、近所の人が集って、飲み物を飲んでいる。台湾や韓国なら、町の中に屋台や大衆食堂があって、そこに人々が集まる。そこを、繰り返し利用することで、店の人と知り合いになって、人間関係が生まれ、その地域とかかわりを持つことが可能となる。

香港の街角には、飲茶楼や茶餐店。ブラジルには Bar。インドネシアにはワルン。台湾なら、屋台。でなくてはいけないのだ。その地域特有の風土・文化を背景にもつ、誰でも訪れることのできる、オープンな場所が、町の中に必要なのだ。

日本には、どうして、公民館や学校などの公的場所以外に、人が集まり、交流する、オープンなスペースがないのだろうか？。日本も、そのような、公的スペース以外の、地域の人たちが、ちょっとお茶を飲んで、くつろげる、気軽に行ける空間が、各地域に必要なのではないか？。もちろん、公的スペースでもいいのだが、現在の公民館などの施設は、閉鎖的で、その力が弱すぎるようだ。かつての、銭湯や床屋のように、参加者の年齢や、会社・学校などの帰属グループに関係なく、その地域の人が集まることのできるオープンな空間を作ることは、日本の地域コミュニティに対して、大きな役割を果たすだろう。

ブラジルのバールには、TV があって、サッカーの試合がある夜などは、年齢・性別関係なく、ご近所さんが集まって、ワイワイ騒ぎながら、ビールなぞ飲みながら、皆でサッカー観戦をやっていて、とてもうらやましく思えた。そういう空間は、ファーストフード店や、全国展開の居酒屋などの大型チェーン店では、不可能なのだ。イタリアのバールでは、会社に行く前の人が、コーヒーや簡単な朝食をとりに、足を運ぶ。バールに入る人は、バールの店員と、「おはよう！」と挨拶をかわす。挨拶をしない人も、いるだろう。しかし、バールとは、そうやって、朝来たら、「おはよう！」と挨拶する場所なのだ。

また、現在の日本の街づくりの開発、地域への店舗の出店は、車での移動を年頭においた開発が続けられている。歩いていける範囲、という視点が、本来の街のサイズである。近年特に、街のスケールが、人間的スケールから、大きくズレ続けている。そのことが、地域コミュニティの力を、さらに弱めていることも、大きな問題だ。ブラジルやイタリアなどの国も郊外には、大型ショッピングセンターなどを擁するが、各地域コミュニティ毎に、その地域を対象とした Bar などを持っている。こういった Bar や茶餐店のような場所は、歩いて行ける程度の範囲に立地することが、必要である。

子供連れの親子が、ちょっと、ジュースを飲みに来たりする。近所の一人暮らしの老人が、同じ店で、お茶を飲んでいる。店の店主を中心として、一人暮らしの老人と子供

連れの親子の間に、会話が行われ、社会的交流が生まれるかもしれない。また、独身者が、夕食を食べに一人でくる。その独身者と、店主が会話することで、その独身者は、その地域の中とのつながりを感じ、作ることができるかもしれない。その独身者と、店主のなじみの一人暮らしの老人の間で、つながりが生まれるかもしれない。会社帰りのお父さんが、ちょっと一杯引っ掛けに、その店に立ち寄る。そのお父さんと、独身者が、隣の席になって、店の人を介して交流が生まれるかもしれない。二人が知り合いになったことで、また、店主と知り合いになったことで、次に店にくるときの、楽しみが増えるだろう。また、会社帰りのお父さんが、別の会社帰りのお父さんと、この店で知り合いになるかもしれない。じつは、子供が同級生だったりして、そこで、また別のイベントが生まれるかもしれない。

店主も、来る客も、良いことばかりではないだろう。その店で、あまり会いたくない人がいるかもしれない。それが、色んな立場の人が含まれる地域コミュニティの欠点ではある。が、欠点を超える長所を、地域コミュニティは持っている。そこに住む人が、地域コミュニティと繋がりを持とうと思えば、気軽に参加できる場所が必要なのではないか。

そういう場所があれば、何らかの形で、そこに地域のコミュニティが生まれ、訪れた人は、地域コミュニティと、つながりをもつ事が可能となる。何も、「そういう場所が無い」状態は、困る。そういう存在の場所が、地域コミュニティの中に、必要とされている。